

新たな協働学習の試み
群読活動の実践から

A New Trial for Cooperative Learning
---A Report from the Practice of Choral Reading---

桑野幸子・佐藤五郎（東京外語専門学校）

Kuwano, Sachiko・Sato, Goro (Tokyo Foreign Language College)

【要旨】

本稿は、2006年度に協働学習として取り組んだ群読の実践、並びに2007年度実践研究フォーラムで実施したワークショップ、及びそれらを通じて気づいたことについて述べるものである。「気づいたこと」とは、群読の協働学習としての有効性、教師も学習者も自分で体験してこそわかる群読の楽しさ、そして「協働学習」に対する教師各自の認識と、複数教師間でその認識を共有することの重要性である。

This essay aims to illustrate the practice of choral reading we trialled as a method of cooperative learning in the academic year 2006. It was also presented as a workshop at the Practical Studies Forum in 2007. Through the practice in the last academic year and from the result of the workshop, we have recognized the efficiency of choral reading as a method of cooperative learning and the joy both for teachers and for learners which can only be felt through actual experience. Also the importance of each teacher's recognition and the common recognition among teachers for 'cooperative learning'.

【キーワード】 協働学習・群読・4技能の使用・体験・認識の共有

1. 協働学習の定義

協働学習とは、スモール・グループで相互に協力し合いながら、共有する目標の達成を目指す学習のことである。従来のグループ学習と異なる点は、互恵的な相互依存関係があること、目標達成に対して個人の責任があること、リーダーシップや学力のある者だけが活躍するのではなく誰もがリーダーシップを発揮できる状況を作ること、などいくつか挙げられる。

また、もう一つの重要な特徴として、「社会的技能の育成と活用」(ジョンソン, D.W. 他 2001)がある。

さらに、教師の役割は、教え、指導することではなく、学習者たちが「自律的かつ創造的に学ぶことができるように」「引き出しサポートする」(池田他 2007)ことである。

2. 群読とは

群読とは、「複数の読み手による朗読」である。一斉音読とは異なり、作品世界を効果的に表現するために読み方に様々な工夫を凝らす。合唱のように、ソロ、小グループ、全員と読む人数を変え立体的にしたり、声の強弱や大きさ、速さに変化をもたせたり、また、繰り返し読み、追いかけて読みなどを行う。言語技術を磨き、表現力を高める活動として効果があることから、

初等・中等教育で近年取り入れられるようになった。

3. 実践報告

3-1. 群読活動を取り入れるに至った経緯

東京外語専門学校日本語科では、週1コマ(90分)「基礎演習」という授業を設けている。ここでは、主に口頭表現力の向上を目的に、発音練習や音読練習、スピーチ練習などを行っている。学習成果発表の場として、前期にはスピーチコンテストを実施しているが、従来後期にはそのような場を設けていなかった。また、日本語能力試験後のモチベーションの維持も問題となっていた。そのため昨年度、後期にも学習成果発表の機会をつくることになった時、個人活動が主となるスピーチコンテストに対し、後期はグループ活動で行うものをと考えた。そこで選んだのが、群読である。

群読は、4技能全てを用いる活動である。私たちは、詩の鑑賞、脚本作成、練習を通して、読み方や話し合い方などの言語技術を向上させることを目標とした。さらに、卒業前に取り組むということから、それまで身に付けてきた日本語学習の集大成となるような活動にしたいと考えた。そのためには、教師主導ではなく、学生が主体的に日本語を使用しながら学びの相乗効果が生まれる環境づくりが必要であり、それを実現するのが協働学習だと考えた。

なお、ジョンソン, D.W.他(2001)によると、協働学習には表1左欄のような要素¹があり、群読活動には、その全ての要素が含まれていると考える。それを右欄に示す。

表1

協働学習の要素	群読活動
1. 相互協力関係がある	個人 グループ、グループ 個人の学びが相互協力関係の中で繰り返される。
2. 個人の責任がある	個人が各々の得意分野を生かした主体的な関わり方が必要。
3. メンバーは異質で編成	日本語レベル、国籍、年齢、性別を問わず、異質なメンバーでグループ編成が可能。
4. リーダーシップの分担をする	各々の得意分野が生かせる活動で、役割を担う。
5. 相互信頼関係あり	一人ではできないことも仲間と一緒にだったからこそできたと感じたり、活動の中で互いを認め合ったりするところから信頼関係が生まれる。
6. 課題と人間関係が強調される	課題達成はもちろん、グループのメンバーとやりとりをする中で、人のかかわり方の大切さも強調される。
7. 社会的技能が直接教えられる	作品を作り上げる過程で、主張、理解、受容、譲歩などを行う際、社会的技能を使う。
8. 教師はグループを観察、調整	教師は、協働学習が円滑に進むように、観察、調整役としてグループを見守る。
9. グループ改善手続きがとられる	毎回の活動後には必ず振り返りを行い、課題達成・協働学習に対して改善の有無、気づき等を挙げ、次の活動に生かす。

3-2. 活動概要

期 間 2006年12月～2007年2月

時 間 90分×8コマ(「基礎演習」全15コマのうちの後半)

学習者 レベル 中上級～上級(日本語能力試験1、2級程度)

人数 約20名×4クラス

国籍² 台湾 韓国 中国 香港 オーストラリア マレーシア

目 標 発音練習：

前期に引き続き、発音に気をつけながら読む。

より深い鑑賞：

文字通りの意味理解にとどまらず、言葉の背後にある作者の意図まで推察する。
あるいは、言葉から自分なりの想像も交えて鑑賞・解釈する。

口頭表現力の向上：

自分たちの捉えた詩の解釈が、聞き手に正確に伝わる表現方法を工夫する。

社会的技能の使用：

協働学習では、メンバーで協力しながらグループの共通目標(=群読作品を作り上げること)の達成を目指す。さらに、目標達成の過程で、他者の意見に対し、反論や主張、受容、あるいは妥協、交渉などを行う際、グループ内の人間関係を調整するための社会的技能を使用することも目指す。

3-3. 活動内容

全8回は、大きく三つに分けられる。1、2回目が群読の導入であり、3回目から7回目までが群読発表会に向けた練習、そして8回目が群読発表会である。なお、7回目まではクラスごとに行い、最終回のみ4クラス合同で行った。

次ページに授業計画表を示すが、昨年度はこの計画に基づいて実践を行った。

表 2	目標	学習活動	教材	目標達成のための手立て
1	<ul style="list-style-type: none"> 言葉のリズムをつかむ。 数名で声を合わせて読む面白さを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> リズムが楽しい詩や早口言葉などを利用し、クラス全員またはグループで声を合わせながらリズムに乗って読む。 	詩	<ul style="list-style-type: none"> 3回目以降の群読練習につながるように、練習の中いくつかの読み方（追いかけ読みなど）を盛り込む。
2	<ul style="list-style-type: none"> 実際に体験することを通して、群読とはどのようなものかを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスをいくつかのグループに分け、同じ詩で群読を行う。詩の鑑賞、脚本作り、練習、発表を行う。 	詩	<ul style="list-style-type: none"> 読み手によって解釈・脚本の作り方が異なることに気づかせるために、作品は一つにする。
3	<ul style="list-style-type: none"> 今後の活動の内容とねらいを理解する。（特に協働学習の面に関して） 	<ul style="list-style-type: none"> 今後の活動の内容とねらいに関する説明を聞く。 各自で群読作品集を読み、自分が群読してみたいと思う作品を選ぶ。 グループ分けを行う。 	群読作品集	<ul style="list-style-type: none"> 発表会までのスケジュールを把握させる。 活動の趣旨、ルールを伝える。 <ol style="list-style-type: none"> 結果だけでなく、作り上げていく過程が重要であることを伝える。 活動は全て日本語で行う。 時間管理は自分たちで行う。 役割分担を工夫し、各自がその役割を果たす。 グループ分けは、クラスの状況から適宜工夫する。（まずグループ分けを行ってから作品を選ばせる、または同じ作品を選んだ者同士でグループを組む・・・など）
4	<ul style="list-style-type: none"> 詩を深く鑑賞する。（個人） 様々な解釈に触れる。（グループ） 社会的技能の使用。（グループ） <p>自分と異なる意見に対し、主張・交渉・受容・妥協等を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 詩の鑑賞をする。（個人 グループ） 	鑑賞シート 振り返りシート	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞に先立ち伝えたこと <ol style="list-style-type: none"> 言葉の背後にある意味や作者の意図等も想像すること。 意見を出し合い、全員が納得できる読み方にまとめること。（絶対に正しい解釈というものはない） 解釈が脚本作りの基盤となるので、しっかり取り組むこと。
5	<p><脚本作り・練習></p> <ul style="list-style-type: none"> 解釈したことを十分に表現できるよう工夫する。 社会的技能の使用。 <p>自分と異なる意見に対し、主張・交渉・受容・妥協等を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 脚本作り、練習、発表、振り返りを行う。 	脚本作成シート	<ul style="list-style-type: none"> 他グループからのフィードバックを得る。（自分たちの表現意図が伝わっているか確認するための手段） 役割分担は毎回変え、偏らないようにする。 自分たちの姿を客観的に見るために、6回目にビデオ撮影を行う。
6	<p><発表></p> <ul style="list-style-type: none"> 練習の成果を発揮する。 社会的技能を使用してコメントする。（他グループの表現意図を汲み取った上で建設的なアドバイスをする、言われる側の気持ちを考えて言葉や表現に気をつけながらコメントする） 			

WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』
2007年度日本語教育実践研究フォーラム

3-4. 教師の取り組み

表2の「目標達成のための手立て」は、活動に取り組むにあたって考えたことであり、実際の授業ではそれ以外にも学生の状況に応じて、さまざまな手立てを講じた。そこで、具体的に何を行っていたかを、次に示す。

なお、活動の主体は学生であるので、教師は積極的に指導するのではなく、あくまでも学生の気づきを促すという姿勢をとった。また、進学先では日本人と接する機会が増えると予想されるため、単に日本語運用力を向上させるだけでなく、人間関係を円滑にするための社会的技能を育成することも目指した。

発音練習

脚本作り後の練習の際、グループに加わって一緒に読み、発音の誤りに気づかせた。

より深い鑑賞

- ・グループでなかなか鑑賞が深められない時、きっかけとなる言葉をそれとなく与えたり、質問をしたりして、気づきを促した。

口頭表現力の向上

- ・鑑賞したことが読み方に生かされていないと感じた時、どのような鑑賞をしたのかを尋ねた。そうすることによって、学生は自分たちがどのように鑑賞したのかを思い出していた。
- ・発表後、各グループのよかった点やユニークな点を挙げた。それにより、その他のグループは自分たちが持っていなかった視点に気づいていた。
- ・ある学生が重要な指摘をしたにもかかわらず、他の者に流されてしまった時、今のは重要では？と言って立ち止まらせたり戻らせたりした。

社会的技能の使用

- ・他グループに対するコメントで、本人の自覚なしに厳しい言葉が使用されることがあった。言われた本人も、その厳しさに気づいてはいなかったが、教師は驚きの反応を示し、言葉遣いの不適切さに気づかせた。

3-5. 目標はどの程度達成されたか

3-5-1. 教師の気づきより

私たちの掲げた4つの活動目標がどの程度達成されたか、授業中の学生の様子や変化に対する教師の気づきをもとに見ていきたい。

発音練習

練習を重ねる中で発音に気を付ける姿勢が見られるようになり、正しい発音をしているかどうか学生同士で確認し合ったり、教師に尋ねたりするようになった。その結果、練習開始当初と比べ、発表会時にはより正確な発音が身に付いていた。

より深い鑑賞

はじめは言葉の意味を辞書で調べ、辞書的な意味通りにしか捉えていなかったが、他のメンバーの発言や教師の与えるヒントがきっかけとなり、言葉の裏に隠された意味や、作者の意図といったものまで、深く鑑賞できるようになっていった。

また、他のメンバーの解釈を聞くことでお互いに刺激し合い、新たな解釈が次々と生み出されていた。

口頭表現力の向上

他グループの表現を取り入れたり、それをヒントに工夫を行ったりするようになっていた。はじめは、各自のパートを決め順番に読んでいるだけだったが、回を重ねるにつれて、声の強弱やリズム、声の重なり等にも気を配りながら、立体的で厚みのある読み方へと変化していた。

社会的技能の使用

これは教師側から見て最も達成が認められた項目である。例えば、意見が食い違う場合、初めの頃は積極的な者の発言ばかりが力を持ち、そうでない学生たちが意見を言えないことがあった。しかし、話し合いが進むにつれ、どの学生も発言回数が増えていた。また、その際も、相手を傷つけない言い方で反論したり、自分の意見を主張したりするようになっていった。

さらに、他グループの発表に対するコメントも変化していった。初めは「よかった」などの単純なものが多かったが、回を重ねるに従い、そのグループの表現意図を汲んだ上で、「それなら、こんな読み方もあるのでは？」といったアドバイスに変わっていった。

3-5-2. 学生の振り返りシートより

以上のように、活動目標は達成されたと考える。さらに、この考えを支えるものとして、発表会後に書かせた「振り返りシート」にあったコメントをいくつか紹介する。なお、学生の言葉は原文のまま記述する。

発音練習

- ・今まで日本語の発音はこんなに正しくなかった。これからもっと注意しなければなりません。
- ・外国語を勉強している時、やはり正しく発音して、相手に聞き取られることは一番大切だと思います。

より深い鑑賞

- ・詩を読む時、ただ読むだけではなく内容をもう一回考えるようになりました。
- ・読む人によってそれぞれ感じるのが大変違うことがわかっておもしろかったです。

口頭表現能力の向上

- ・外のグループの発表を聞いて同じ詩を違う読み方で読んでいるのが、またそれぞれ独創性があったて少し驚きました。
- ・同じ作品だが、違う表現し方で、違う感じが表せることができます。

社会的技能の使用

- ・みんなの意見がバラバラになったから、その中から、チームワークに合うのを出して、その能力が今回の群読の工夫です。
- ・表現の方は皆自分の意見がある。この契機でコミュニケーションは大切なことを知っている。自分の気持ちをとうやうや別の人に伝えてのは難しい。皆の気持ちを一緒に別の人を伝わらせてはもっと難しい。
- ・学んだことはいいことをやりたいなら話し合いは大切だということ。
- ・人とのコミュニケーションはとても難しいと思います。うちのグループと話し合う度に、そうの感じが出てきました。・・・(略)・・・意外に気づいたのはグループワークの難しさです。

4. ワークショップ報告

昨年度の群読の実践を振り返る中で、「群読をよりよい実践とするために、他の人の意見も聞いてみたい」「協働学習として有効な試みなのか、他の現場でも実践可能なのか知りたい」といった思いが生まれた。そこで、2007年度実践研究フォーラムにおいて、実践報告を行うことを考え、「新たな協働学習の試み 群読の実践から」というタイトルでワークショップを行う機会を得ることができた。

以下に、その活動概略と、気づきについて述べる。

4-1. 活動概略

日時 : 2007年8月4日 14:00~17:00

目的 : 群読活動を実際に体験してもらい、そこでの気づきや感想などを出し合う。さらに、私たちの実践を報告する。これらを通して、協働学習としての群読の可能性について考えを共有する。

参加人数 : 9名

内容 : 第1部 群読活動体験

協働とは？

群読とは？

グループ分け・自己紹介

作品鑑賞(個人 グループ)

脚本作り・練習

発表(ビデオ撮影)

活動の振り返り(で撮影したビデオの視聴)

第2部 まとめ

実践報告

意見交換(群読活動を行う上での留意点、今回行った以外の実践方法など)

4-2. ワークショップを振り返って

まず、参加者の中から、「楽しかった」「興味深く学ぶことができた」という感想が出され、

群読の楽しさを実感してもらうことができたという手応えを得た。また、「意見が言えない人の気持ちがあった」という声もあり、自らが学習者となってその気持ちを体験してみるという機会を提供することができたと感じた。

さらに、「ひとつの目標に向かって活動することで、メンバー間に親近感が生まれた」という意見もあり、この「親近感」というのが、協働学習としての群読が生む効果のひとつなのではないかと考えた。

私たちが昨年度、群読作品として詩を選んだのは、詩なら多様な解釈が生まれると考えたことが大きい。今回の参加者からも、「詩のように正解が出ないものが作品として適切」「解釈に分からない部分があるからこそ、協働が起きるのだと感じた」といった意見が出され、協働学習としての群読には、詩はやはり適切なのだと実感することができた。

残念ながら、「群読の可能性について考えを共有する」ことは、時間不足のため行えなかったが、参加者との話し合いの中で、確信を強めたり、新たに気づいたりしたことがある。それらについて、次に述べる。

5. 群読の実践にあたり

5-1. 群読を体験することの意味

まず、今回のワークショップを通じて確信を強めたのは、「群読は実際に体験してこそ、そのおもしろさがわかり、自信を持って実践に取り組める」ということである。

そもそも、群読を授業で行うことにしたのは、学習者が楽しんで取り組み、かつ、いろいろな学びの要素が含まれた活動であると思ったからである。とはいえ、そのことが実感できたのは、自分たちも取り組んでみてからであった。昨年度、教員4名も発表会で群読を行うことにし、学生と同じ手順で取り組んだ時、初めてその楽しさを学生の目線で感じる事ができた。さらに、協働で行うことにより、さまざまな学びが得られることも確認できた。そしてこのことにより、楽しく、確かな教育的効果のある活動だと自信を持ちながら取り組めるようになった。

ワークショップには、群読というものを知らず初めて体験した参加者もいたが、ワークショップ終了後には、「おもしろかった」「達成感があった」といった感想を聞くことができた。このような実感が、今後群読に取り組む際、その目的や楽しさを学習者に伝える上での拠り所となるのではないだろうか。

5-2. 「協働学習」に対する共通認識

次に、ある参加者の一言がきっかけで気づいたことは、「協働学習」といっても、人それぞれ捉え方が違うということである。認識の異なりは否定するものではないが、昨年度の私たちのように複数の教員で同じ活動に取り組む場合は、認識を共通にしておいた方がいいのではないだろうか。

というのは、「協働学習とは何か」「それはどのようにすれば起こせるのか」といったことについて教員同士が話し合い、一致点を見出すことから出発しなければ、仮に協働学習をグループ学習と同一のものと捉えている教員がいた場合、そのクラスでは協働が行われなくてもいいからである。そして、「協働学習に取り組む」という教員間の共通目標もまた、達成されないからである。昨年度の取り組みを例にとれば、私たちは、「協働学習としての群読」「どうす

れば協働学習が起こるか」を考えることから出発し、4クラス共通の授業計画を作成した。そして、それに基づき、どの段階でどの活動に取り組み、また、どのようなワークシートを使用するかといったことも決めて活動を行った。さらに、活動過程において情報交換を行っていたので、認識にズレが生じることはなかった。

しかし、もし以上のような共通認識を持っていなかったら、活動やワークシートもただこなすだけで、群読活動の持つ協働学習の要素を生かせずに終わってしまっただろう。そして、教師もそのことに気づかないまま、群読発表の体裁を整えるだけで成功したと捉える教師もいたかもしれない。

したがって、「協働学習としての群読」を成功させるためには、「なぜそれを行うのか」「その活動は協働学習としてどのような意義があるのか」という認識を共通にしておかなければならないと考えるのである。

6. まとめ

以上述べてきたように、群読は協働学習の要素を含んだ活動であり、さまざまな教育的効果も認められる。しかし、「協働学習としての群読」を成立させるためには、「協働学習とは何か」という認識を持つておくこと、そして複数教員で取り組む場合にはその認識を共有しておくことが必要であろう。

今回のワークショップは、私たちの実践をより深く振り返る機会となった。どのような目的でこの活動に取り組んだのか、結果としてどのような学習効果が見られたのか、などを改めて検証することにより、自信を得たり、改善点を発見したりすることができた。また、協働学習に関する文献に当たることにより、実践を支える理論を再確認することもできた。今後は、それらをもとに活動計画を見直し、再び実践、振り返りを行い、よりよい活動を目指していきたい。そして、またどこかで実践報告ができれば、と考えている。

1 ジョンソン,D.W.他(1998)『学習の輪 アメリカの協同学習入門』p.32 二瓶社

2 韓国籍以外は、いずれも母語は中国語

【参考文献】

- (1) 家本芳郎(1996)『新版楽しい群読脚本集』高文研
- (2) 家本芳郎+日本群読教育の会(2003)『いつでもどこでも群読』高文研
- (3) 家本芳郎・重水健介+日本群読教育の会(2004)『続・いつでもどこでも群読』高文研
- (4) 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- (5) シャラン,Y・シャラン,S(2001)『「協同」による総合学習の設計 グループ・プロジェクト入門』北大路書房
- (6) ジョンソン,D.W.他(1998)『学習の輪 アメリカの協同学習入門』二瓶社
- (7) ジョンソン,D.W.他(2001)『学生参加型の大学授業 協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部